

5

続「体育・保健体育科」における学習指導要領の変遷

副会長 池田延行

はじめに

日本学校体育研究連合会が創立70周年を迎える令和2年(2020年)は、小学校において新学習指導要領が完全実施される年度である。また、来る7月24日からは、東京オリンピック・パラリンピックが連続的に開催されることから、令和2年は大変記念すべき年となってくる。

ここでは、学習指導要領が文部省告示とされた昭和30年代から新学習指導要領が完全実施される令和年代までの各年代の特徴を改めて整理することで、学習指導要領の変遷をまとめようとするものである。

学習指導要領はほぼ10年に1回のペースで改訂がなされ、各年代の児童・生徒や学校を取り囲む様々な課題への対応がなされることとなる。この意味では、学習指導要領の変遷を整理することは、各年代での教育全体や体育・保健体育科の固有の「目標・内容等」を検討することにもなり、大変興味深いことでもある。

なお、本原稿内容はできるだけ各年代の学習指導要領の変遷をできるだけ客観的に示すことを意図しているが、執筆者自身の私案や思いを述べている箇所もあることをお許し願いたい。

1

各年代の学習指導要領における体育・保健体育科の目標、授業時間数、改訂の特徴等

表1は、体育・保健体育科の変遷(昭和30年代以後)を教科の目標や体育(関連)と保健(関連)の年間時間数(単位数)、各年代の学習指導要領の特徴などを整理して示したものである。

(1)体育・保健体育科の目標について

教科の目標は、体育・保健体育科が基本的に目指す目標や役割を示したものである。

表1からは、体育・保健体育科の目標は、「①体力の向上を図ること」、「②運動に親しむとともに、運動技能を高めること」、「③健康の保持増進を図ること」が各年代ともに明示されている。なお、「昭和30年代」から「昭和40年代」に教科の目標として示された「社会生活に必要な態度の育成」は、昭和50年代以降は、小学校では体育科の学年目標に示され、さらには体育・保健体育科の内容の1つ(「態度」の内容)

として記述されている。

また、「体力の向上」は全ての年代における体育・保健体育科目標の1つであるが、特に「昭和40年代」までは、「心身の健全な発達を促し、活動力を高める」と記述され、体育・保健体育科の最も重要な教科の目標としての意味合いが強いと思われる。加えて、「体力の向上」に関しては、体育・保健体育科としての教科での扱いだけではなく、学校の教育活動全体で取り組むことが「昭和40年代」以後の学習指導要領の「総則」に示された。この「総則」への「体育に関する指導」の記述が、「体力の向上」に向けて学校をあげての取り組みの大きなきっかけともなっているとされている。

こうした「体力の向上」を最も重要な教科の目標としていた学習指導要領の記述に変化が見られたのが、「昭和50年代」の学習指導要領改訂においてである。この時期の学習指導要領の改訂では、「生涯スポーツへの志向を重視すること」が示され、「運動に親しむこと」は、「昭和50年代」の体育・保健体育科の特徴的な目標として記述されている。この「運動に親しませる」、「健康の保持増進」、「体力の向上」を具体的な目標として示しながら、究極的な教科の目標「明るく楽しい生活を営む態度の育成(小学校)」に向かうとする教科の目標の構造は、「平成20年代」の学習指導要領改訂までの4回にわたる改訂では大きな変化は見られない。体育・保健体育科での様々な学習が生涯を通して豊かなスポーツライフにつながることに大きな期待と役割が示されていることになる。

体育・保健体育科の目標は、直近の「平成30年代～令和年代」において修正がなされた。まずは、全ての教科等において獲得を目指す3つの資質・能力を踏まえた共通的な教科の目標が記述されたことである。

すなわち、3つの資質・能力である「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」が具体的な教科の目標として示され、心身の健康の保持増進と豊かなスポーツライフの実現が究極的な教科の目標としてまとめられた。

また、目標の冒頭では、教科固有の見方・考え方を働かせることや課題を見付け、その解決に向けた学習過程を重視することも示されている。

(2)体育・保健体育科の授業時間数について

表1では、「昭和30年代」から「平成30年代～令和年代」までの小学校・中学校・高校における「体

育」及び「保健」の授業時間数の変遷も示している。
以下に体育・保健体育科の授業時間数の特徴を示すこととする。

①小学校・中学校の授業時間数

小学校・中学校の体育・保健体育科の授業時間数は、学校完全週5日制実施の下での各教科等の授業時間数の削減がなされた「平成10年代」の年間90時間を除いて、各年代ともほぼ年間105時間であることがわかる。小学校・中学校共に毎週3時間の体育・保健体育科の授業が、各年代を通して実施されていることとなる。

(平成20年代以降の小学校高学年は除く)

なお、「昭和40年代」の年間125時間は体力の向上への期待が反映されたと思われ、また「平成元年代」の中学3年生105～140時間は、選択教科としての保健体育科の位置づけによるものである。

②高校の授業時間数

高校の保健体育科の授業時間数は、各年代共に3年間の合計単位数が示されており、「科目体育」と「科目保健」は別々に記述されている。

高校の「科目体育」の単位数は、昭和30年代は「男子9単位と女子7単位」とされており、男女によって単位数の違いが見られる。「昭和40年代」からは男女による単位数の違いはなくなり、「平成元年代」にかけては「7～9単位」が示されている。また、小学校・中学校と同様に「平成10年代」での各教科等の

授業時間数削減によって「科目体育」の授業時間数も「7～8単位」とされ、その単位数が新学習指導要領でも継続されている。

③保健関連の授業時間数

小学校での保健関連(保健領域)の授業時間数は、「平成元年代」までは高学年で10%が示されていたが、「平成10年代」に変化が見られている。その1つは、小学校中学年から保健領域の授業が行われるようになったことである。加えて、中学年と高学年共に、2学年での年間授業時間数(程度)が示されることとなった。

中学校での保健関連(保健分野)の授業時間数は、大きく3つの年代に区分される。すなわち、「昭和30年代～昭和40年代」の3年間70時間、「昭和50年代～平成元年代」の3年間55時間、そして、「平成10年代～」の3年間48時間である。

高校の保健関連(科目保健)の授業時間数は、いずれの年代においても「3年間2単位」が示されている。

(3)各年代の学習指導要領での特徴と重視する事柄

今まで、体育・保健体育科の目標と授業時間数の視点から、各年代の学習指導要領の変遷を眺めてきた。

これらの視点は各年代の学習指導要領の特徴を示すことにもなるが、それらの視点に加えて、体育・保健体育科の内容や重視する指導の観点などを加えることで、より各年代の特徴がクローズアップされることになるとと思われる。表1の下段には、「各年代の特徴」と「各年代の重視する事柄(池田私案)」を示している。

表1 学習指導要領における体育・保健体育科の変遷(昭和30年代以後)

改訂の年代(告示年度)	昭和30年代(昭和34・35年度)	昭和40年代(昭和43～45年度)	昭和50年代(昭和52・53年度)	平成元年代(平成元年度)	平成10年代(平成10年度)	平成20年代(平成19・20年度)	平成30年代～令和年代(平成28・29年度)	
体育・保健体育科の目標(要約)	<ul style="list-style-type: none"> 心身の健全な発達を促し、活動力を高める。 運動に親しませ、運動の仕方や技能を高める。 社会生活に必要な態度を養う。 健康な生活を営む態度を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 心身の健全な発達を促し、活動力を高める。 運動に親しませ、運動の仕方や技能を高める。 社会生活に必要な態度を養う。 健康な生活を営む態度を育てる。 	<ul style="list-style-type: none"> 運動に親しませる。 健康・安全について理解させる。 体力の向上 ↓ 明るく楽しい(豊かな)(活力ある)生活を営む態度の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 運動に親しませる。 健康・安全について理解させる。 体力の向上 ↓ 明るく楽しい(豊かな)(活力ある)生活を営む態度の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 心と体を一体としてとらえ 運動に親しむ資質や能力の育成 健康の保持増進 体力の向上 ↓ 明るく楽しい(豊かな)(活力ある)生活を営む態度の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 心と体を一体としてとらえ 運動に親しむ資質や能力の育成 健康の保持増進 体力の向上 ↓ 明るく楽しい(豊かな)(活力ある)生活を営む態度の育成 	<ul style="list-style-type: none"> 体育や保健の見方・考え方を働かせ 知識及び技能の獲得 思考力、判断力、表現力等、他者に伝える力 健康の保持増進と体力向上 ↓ 心身の健康の保持増進と豊かなスポーツライフの実現 	
体育・保健体育科の時間数等	小 105時間(保健を含む) 中 105時間(保健を含む) 高 9単位(男子)7単位(女子)	小 105時間(保健を含む) 中 125時間(保健を含む) 高 7～9単位	小 105時間(保健を含む) 中 105時間(保健を含む) 高 7～9単位	小 105時間(保健を含む) 中 105時間(中3・105～140)(保健を含む) 高 7～9単位	小 90時間(保健を含む) 中 90時間(保健を含む) 高 7～8単位	小 105時間(高学年90時間)(保健を含む) 中 105時間(保健を含む) 高 7～8単位	小 105時間(高学年90時間)(保健を含む) 中 105時間(保健を含む) 高 7～8単位	小 105時間(高学年90時間)(保健を含む) 中 105時間(保健を含む) 高 7～8単位
小・中・高は1年間	小 高学年(10 <small>分</small>) 中 70時間(2年・3年で) 高 2単位	小 高学年(10 <small>分</small>) 中 70時間(3年間) 高 2単位	小 高学年(10 <small>分</small>) 中 55時間(3年間) 高 2単位	小 高学年(10 <small>分</small>) 中 55時間(3年間) 高 2単位	小 中学年(2学年で8時間程度) 高学年(2学年で16時間程度) 中 2単位	小 中学年(2学年で8時間程度) 高学年(2学年で16時間程度) 中 2単位	小 中学年(2学年で8時間程度) 高学年(2学年で16時間程度) 中 2単位	
各年代の特徴	①学習指導要領の告示化	①学習指導要領、総則に「体育に関する指導」が明示	①基本の運動の新設(小)	①選択制の導入(中・高) ②格技から武道へ	①「体ほぐしの運動」の導入(小・中・高) ②「学び方の内容」の提示(小・中・高) ③「体づくり運動」の小学校低学年からの導入 ④武道・ダンスの必修化	①「基本の運動」の廃止 ②「〇型(ゲーム)」の提示(小・中・高) ③「体づくり運動」の小学校低学年からの導入 ④武道・ダンスの必修化	①「主体的・対話的で深い学び」の重視 ②「体力を高める運動」から「体の動きを高める」運動へ ③武道の種目の多様化	
各年代の重視する事柄(池田私案)	運動自体の構造を重視	運動の本質的な特性を重視	生涯スポーツへの志向を重視	個に応じた指導の重視	「生きる力」を育む指導の重視	教える内容を明確にする指導の重視	育成を目指す3つの資質・能力の獲得の重視	

注) 高等学校の体育及び保健については、3年間の合計単位数を示している。

戦後の学習指導要領改訂は「昭和30年代の学習指導要領の告示化」が大きなポイントとなり、次いで、体育・保健体育科では、「昭和40年代」の学校教育全体での体力向上への取り組みの明記（「総則体育」）によって学校教育活動での体育指導への期待・役割の拡大も読み取ることができる。

さらには、「昭和50年代以降」の生涯スポーツへの志向を踏まえての内容の変更（「小学校での基本の運動の新設」）なども大きな転換期となったと思われる。この生涯スポーツへの志向の重視は、その後の「個に応じた指導の重視」→「生きる力を育む指導の重視」へと引き継がれることとなる。

こうした学習指導要領の改訂に軌道修正が求められたのが「平成20年代」の改訂であると言われている。この背景には、「PISAショック」と言われるような日本の児童・生徒の学力低下や体育関連での長期的な体力低下が指摘されている。そして、この状況を変換すべく、各教科等ともに「教える内容を明確にする指導の重視」が提示され授業時間数も従前に近い形で復活されることとなった。そして、体育・保健体育科の内容においても、表1にあるような幾つかの検討と改訂がなされている。

こうした各年代の学習指導要領の特徴や重視する事柄は、令和2年度の小学校から順次完全実施される新学習指導要領にどのようにバトンタッチされることになるであろうか。

2 「体育の授業は時代とともにある」ということ

前述のような、体育・保健体育科の目標や年間時間数（単位数）、各年代の特徴、などは実際の授業づくりにどのように結びついているであろうか。

ここでは、「体育の授業は時代とともにある」というテーマで、授業づくりへの学習指導要領の具体的な結びつきを検討してみたいと思う。

表2は「各年代の学習指導要領での特徴」と「全国学校体育研究大会研究主題の歩み」を対比して示したものである。

表2の左側に示した「各年代の学習指導要領での特徴」は、表1での記述内容とほぼ同様であるが、各年代の特徴（◎）と、主に授業づくりの観点からのポイントを整理して示したものである。

表2の中央の記述内容は、令和元年に58回となる「全国学校体育研究大会研究主題」を年代ごとの特徴的な研究主題をピックアップして示したものである。

（提示した研究主題は、各年代の学習指導要領の特徴

を踏まえていると思われるものを抜粋して示している。）

両方の記述を対比してみると、各年代の学習指導要領の特徴を生かした授業づくりに向けての研究主題の設定が大変分かりやすいと思われる。

例えば、「昭和40年代」の研究主題では、「運動技能の効果的な指導」や「体力づくり」などのテーマが特徴的である。また、生涯スポーツへの志向を重視した「昭和50年代」では、「生涯スポーツを志向した…」や「運動の特性に基づく楽しさを味わうため…」などの研究主題が印象的である。さらに、「平成元年代」になると、研究主題に「一人一人が…」とする個に応じた指導を重視する授業づくりへの意図を見ることができる。同様に、「平成10年代」では、「未来を生きる力」や「はずむ心と体」、「心と体をひとつに」などの研究主題に、当時の学習指導要領改訂を踏まえた授業づくりの検討を読み取ることができよう。さらには、前述のように学習指導要領の改訂に軌道修正が求められた「平成20年代」の研究主題では、「確かな知識と技術を身につけ…」や『「わかる・できる・かかわり合う」体育授業』などの表記が改訂との関連をうかがうことができる。

そして、新学習指導要領の改訂を踏まえた近年の研究主題では、「主体的・対話的で深い学びを通して…」とする授業づくりに向けての検討がなされていることになる。

このように、各年代の学習指導要領の特徴を踏まえて、「体育の授業は時代とともにある」とすることができるとと思われる。

なお、表2の右側に示した内容は、「教育全体の（学習指導要領の）変遷」を年代ごとに記述したものである。この記述からは、「教育全体の变遷」を年代ごとに「教育の〇〇化」と示した興味深い指摘や各年代の教育全体の特徴を見ることができる。また、「各年代の学習指導要領での体育・保健体育科の特徴」は「教育全体の变遷」とほとんど同じ歩みをしていることが把握でき、教科としての「体育・保健体育科」の意義を再確認したいと思う。

3 今後の体育・保健体育科への期待

(1) 「体育・保健体育科の固有の目標と内容」をめぐって

今後は、新学習指導要領を踏まえた授業づくりに向けての取り組みが、一層加速されると思われる。

その授業づくりに向けての期待は、まずは「豊かな身体活動をいつも確保する」という「体育・保健体育

表2 体育の授業は時代とともにある（学習指導要領の変遷と大会研究主題との関連）

改訂の年代	各年代の学習指導要領での特長	全国学校体育研究大会研究主題（平成30年度佐賀大会報告書）より	教育全体書の変遷（志水宏吉著）
昭和40年代	<ul style="list-style-type: none"> ◎「運動の本質的な特性」を重視し、運動技術の向上を目指す ●「体育指授」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「運動技術の向上を目指す」 ●「効果的な指導はどのようにし、どのようにつくりだすか」 ●「効果的な指導はどのようにし、どのようにつくりだすか」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「科学的な概念と能力の育成」
昭和50年代	<ul style="list-style-type: none"> ◎「生涯スポーツへの志向」を重視し、個性に合った授業づくり ●「運動の楽しさ」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「生涯スポーツへの志向」 ●「個性に合った授業づくり」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「教育の人間化（学校生活と人間生活の充実）」
平成元年代	<ul style="list-style-type: none"> ◎「個性に応じた指導」の重視 ●「個性に応じた指導」 ●「個性に応じた指導」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「個性に応じた指導」 ●「個性に応じた指導」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「個性の重視（個性重視）」
平成10年代	<ul style="list-style-type: none"> ◎「生きる力を育む」「心身の健康」を重視し、授業づくり ●「生きる力を育む」「心身の健康」 ●「生きる力を育む」「心身の健康」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「生きる力を育む」「心身の健康」 ●「生きる力を育む」「心身の健康」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「総合的な学習の時間（総合的な学習）」
平成20年代	<ul style="list-style-type: none"> ◎「内容を明確にする」「内容を明確にする」を重視し、授業づくり ●「内容を明確にする」「内容を明確にする」 ●「内容を明確にする」「内容を明確にする」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「内容を明確にする」「内容を明確にする」 ●「内容を明確にする」「内容を明確にする」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「教育（内容）の明確化（池田私案）」
平成30年代～令和年代	<ul style="list-style-type: none"> ◎「3つの資質・能力の重視」を重視し、授業づくり ●「3つの資質・能力の重視」 ●「3つの資質・能力の重視」 	<ul style="list-style-type: none"> ●「3つの資質・能力の重視」 ●「3つの資質・能力の重視」 	

科の固有の目標と内容」をしっかりと押さえることで教科の役割を果たしていくことができるということである。

新学習指導要領で身に付けることが重視される「3つの資質・能力」についても、体育・保健体育科の教科としての中心軸は、「しっかりと身体を動かす。そして、その豊かな活動を通して幾つかの資質・能力を獲得していくこと。」である。

著しい成長期にある小学校から高校までの児童・生徒が充実した学校生活を過ごすために、「体育・スポーツとの出会い」のさらなる活性化に大きな期待を寄せたいと思う。

（参考文献）

- 注1)「志水宏吉、学力を育てる、岩波新書、2005年、(P28)の「表1-1」を参考にした。
- 注2)「学習指導要領データベース、学習指導要領データベース作成委員会、国立教育政策研究所内、平成13年3月31日」を参考にした。